

平成21年度 附属中学校「教育相談室」活動報告

青木 真理^{*a}、金成 美恵^{*b}、樋上 聖^{*c}
二瓶久美子^{*c}、島 義一^{*d}、白石 豊^{*e}

附属中学校を中心とする「教育相談室」活動に関して、平成21年度の活動内容、相談件数と内容などについて報告し、今後の課題を検討する。

〔キーワード〕 教育相談室 スクールカウンセラー 大学附属中学校 教育相談組織
ピア・サポート

I はじめに

福島大学附属4校園では平成17年度より、共同事業である「教育相談室」が設置され、附属中学校を活動母体として運営されてきた¹⁾²⁾³⁾⁴⁾⁵⁾。

「教育相談室」設置に先立ち、平成14年度からスクールカウンセラーが配置され、18年度には、従来の青木（大学と兼務）に加え、非常勤職として金成が6月より雇用され、2名体制となった。金成は附属中学校に加え附属小学校にも勤務している。

本報告は平成21年度の「教育相談室」について、附属中学校を中心としたスクールカウンセラーの活動、附属中学校の教育相談推進委員会、「ピア・サポートプログラム」、附属四校園教育相談推進委員会の4点から報告する。執筆の分担は、Ⅱを主として金成が、青木と協議しながら執筆、Ⅲを樋上、Ⅳを二瓶、Ⅴを金成と樋上、Ⅵを島が執筆し、そのうえで執筆者全員が議論を行い、青木の責任で全体をまとめた。

Ⅱ スクールカウンセラーの活動

1. 活動形態

スクールカウンセラー（以下SC）2名の平成21年度勤務日数はのべ119日であった。教育相談推進委員会など会議への出席のため2名のSCが通常の勤務日以外に出勤したことがあったので、前年度より勤務日数が増えている。これ以外に附属小学校勤務が11日ある。

附属中では通常青木が月曜日13時から17時まで週1回、金成が火・木曜日10時から14時の週2回の勤務で、相談室にはSCがほぼ週3日入室している。その中で月1日は金成が附属小学校に勤務した。附属小学校では原則的に月曜日から火曜日の11時から15時までの勤務であった。

活動の場所は附属中学校では「スマイル・ルーム」と呼ばれる相談室が中心であるが、本年度始まった昼食時間への参加（後述）は各教室で、また必要に応じ

て保健室や隣接の保健相談室で生徒の話を聞くこともあった。附属小学校ではSC用の部屋は設けていないため、教務室や少人数支援室（愛称「ほっとルーム」）を拠点として少人数支援室担当者との情報交換を行ったり、各教室で児童の行動観察を行ったりした。平成21年度は児童の相談は少人数支援室担当者が受け持つこととしたため、SCへの相談件数は0件であった。また附属中学校に隣接する附属幼稚園の要請に応じて、園児の保護者に対する面接も行った。

中学校での相談ケースは原則的にSCの担当者を固定したが、相談者の相談内容や時間的制約を考慮して担当SCを交代するケースもあった。

2. 活動回数、相談件数、相談内容

平成21年度のSCの相談件数、相談内容、面接回数は表1、表2、表3のとおりである。また18年度からの相談件数の推移を図1に、面接回数の推移を図2に示した。

平成21年度の相談件数は73件で、平成18年度にSC2名体制になって以来最も多く、生徒全体の約15パーセントが相談室に何らかの関わりを持っていることになる。エゴグラムや箱庭などの体験活動での入室者が前年度より14名増えたことが要因で、相談室を気軽に訪れる生徒が増えたことが示された。また相談者の中には以前何らかの体験活動に参加したものが5名（平成21年度新規は2名）おり、生徒相談者の約2割を占めている。体験活動で入室することは相談室の様子を観察しSCとの心理的距離を縮める効果があると思われる。相談者の早期入室につながると考えられる。平成22年度も引き続き生徒への体験活動参加を積極的に呼びかける予定である。

面接回数では保護者面接の回数が前年度41回のところ99回に増えたのが目立つ。平成21年度は定期的・継続的の面接が増えたことと保護者同席面接・両親面接が増えたことがその要因である。生徒の相談人数が22名と、前年度より5名増えたにも関わらず面接回数が120回と26回減ったのは、比較的短期間で終結に向かった

* a : 福島大学総合教育研究センター教育相談部門 * b : 福島大学附属中学校スクールカウンセラー * c : 福島大学附属中学校 * d : 前福島大学附属中学校 * e : 福島大学人間発達文化学類、福島大学附属中学校長

ケースが多かったことによる。相談への心理的ハードルが低くなり、問題が深刻化しないうちに相談するケースが増えたことが示された。

教員とは口頭連絡や勤務日誌などで情報交換をしたが、双方の時間が合わない場合は養護教諭が仲介し伝達を行なった。なお、養護教諭とSCはほぼ毎回情報交換とコンサルテーションを兼ねた話し合いを持っており、この表の面接回数には含めていない。

表1 平成21年度のSC相談件数

関わった相談ケース	73件
校種・学年別件数	
附属中	72件
1年	24件
2年	37件
3年	10件
卒業生	1件
附属小	0件
附属幼稚園	1件

表2 平成21年度のSC相談の内容

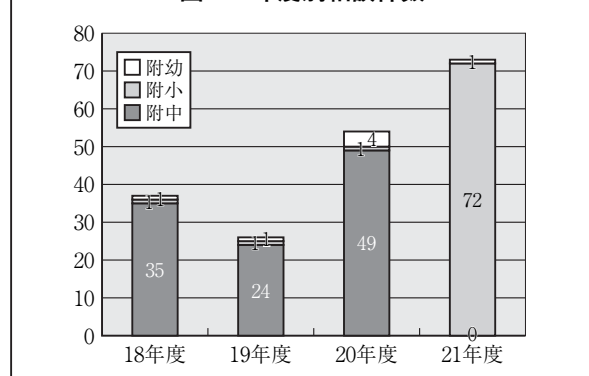
箱庭・エゴグラム体験	46件
友人関係	17件
不登校（別室登校含む）	4件
学力不振	2件
不安感・抑うつ感	2件
集団不適応・育児・発達・自殺願望・集中力欠如	
反抗期の対応・摂食障害・自分自身について	
その他	各1件

*なお、1つのケースが二つ以上のカテゴリーにまたがることもある。

表3 平成21年度のSC相談の面接回数

面接の対象	人数	面接回数
生徒・児童	22	120
保護者	10	99
教員		45
生徒（箱庭・エゴグラム体験）	46	79
計	48	343

図1 年度別相談件数



3. 体験活動

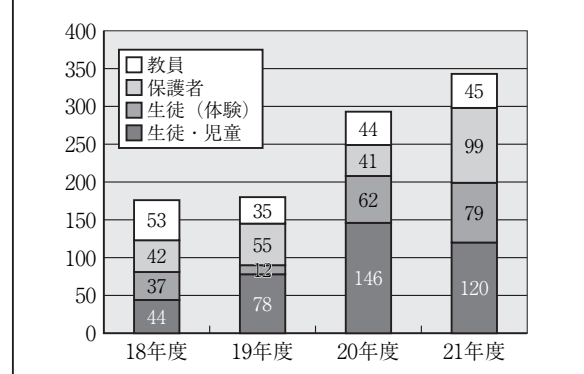
附属中学校では平成18年度より箱庭、エゴグラムの

体験を通して、より多くの生徒が相談室を利用できるよう働きかけてきた。「悩みがあっても周囲の目を気にして来室を躊躇した」という来室生徒の声を聞き、相談室が持つ“悩み相談”のイメージを“自分自身を知る場”に変え、潜在的ニードを持つ生徒に対して入りやすい相談室になることを目指した。

箱庭は平成17年度終わりに設置し、エゴグラムは平成18年度に導入されたが、利用者は増加傾向で平成21年度は箱庭体験26名、エゴグラム33名の利用があった。両方を体験している生徒や複数回体験しているものもあり、来室回数はこのべ79回になる。エゴグラムは半年から1年の間隔を置いて再実施することを勧められているが、SCからのフィードバックを基に以前のデータと比較して自分をふりかえる体験者が複数あった。SCにアドバイスを受けるだけでなく、友人との話の中で互いに指摘し気づきを得ることは相談室の新しい役割の可能性を示しているのではないかと。

今年度から導入されたコラージュは、当初箱庭の希望者が多く箱庭作成に参加できない生徒のために用意したが、実際はコラージュ作成を希望して来室する生徒が多かった。複数で作成する場合、箱庭は“動”の雰囲気が進められるのに対しコラージュは“静”のイメージで、選択は体験者の好みで決められた。

図2 面接対象者別面接回数



また青木考案の「私のお気に入り」はお気に入りのものを思い浮かべ、列記するワークシートである（巻末参照）。体験を求めてやってくる生徒には、自分の嗜好を列挙することで自分を知ることを促す目的で使われた。カウンセリングの場では、抑鬱的で思考の幅が狭くなっているクライアント、自己評価の低いクライアントに用い、リフレーミングを促した。

4. 昼食時間への参加

平成21年度は1学年の生徒全員が直接SCと話す機会を持つことを目的に、2名のSCが分担しすべての生活班（32班）で昼食をとった。生活班は各クラス8班あり、1班あたり大体5名の構成となっている。弁当参加は9月から1月までSC勤務日の昼食時間（15分間）に実施された。SCが教室に出向き普段出会え

ない生徒たちと昼食をとりながら話をする中で、生徒がSCを身近に感じ敷居の低い相談室につながる可能性が感じられた。また昼食時に話をしたことがきっかけで相談につながったと思われるケースもあった。弁当参加はSCとしても多くの生徒と直接会話する場となり、また相談者の教室での様子を知る場にもなり、より広い視点で情報を得る機会となった。

5. スクールカウンセラーだより（ニューズレター）

平成21年度も前年度と同様2回の特別号を含む計9号の発行となった。「スクールカウンセラーだより」はSCの勤務日告知が主な目的だが、相談室利用のルールを説明したりピア・サポートの参加者募集、エゴグラム・箱庭の体験活動の促進など相談室の活用促進機能を担っている。自宅に持ち帰り生徒だけでなく保護者も目を通すため、SCの勤務日程を確認して保護者から直通電話で予約が入るケースもあった。

なおSCの勤務日は養護教諭が発行する「保健室だより」、各学年発行の「学年だより」にも掲載された。（この項、金成美恵、青木真理）

III 教育相談推進委員会

1. 組織

全校の教育相談活動を包括的に推進する目的で平成17年度から発足した委員会である。21年度のメンバーは委員長（樋上）、各学年より1名ずつの教員、校長、副校長、主幹教諭、養護教諭、SCである。なお、委員長は生徒指導副委員長、養護教諭は生徒指導委員を兼ねている。

2. 会合とその内容

会合は、原則として毎月1回、SCの出勤日にあわせて開催した。内容は、カウンセリングを行っている生徒・保護者への対応と相談の仕方についての協議や相談結果の報告等、また相談室を時折訪問している生徒についての情報交換を中心としている。

会は概ね各学年からの報告、SCによる相談に関する報告と助言、SCとの協議の順で行われた。

会での話し合いの内容は、各学年教諭が各学年スタッフや各担任に伝え、共通理解を図った。

3. 成果と課題

本年度の成果は、月1回当委員会を開催したことにより、情報交換が密になり、普段からSCとすみやかに連携がとられるようになったことである。また、当委員会を年度初めの4月から開催できたことも成果としてあげられる。4月では、入学したばかりの1年生やクラス替えをした2年生、進路に向かう3年生にとって大切な時期でもあり、悩みを抱える時期でもあ

る。そこで、情報交換を行い綿密な連携をとることができた。

一方、会議の内容が相談生徒の報告や協議が中心となるが多かった。年間の学校生活に即した学級におけるピアサポートプログラムの計画や実施など、積極的な教育相談活動の推進を図る必要がある。

（この項、樋上 聖）

IV 保健室との連携

養護教諭は相談の予約状況を管理するとともに、SCと生徒、SCと学級担任、SCと保護者をそれぞれつなぐコーディネーターの役割を担っている。そのために、IIの2.にも記載されているように、SCの勤務時には毎回情報交換を行っている。内容としては、SCに相談をしている生徒の変化についてはもちろん、相談はしていないが、保健室でとらえられた気になる生徒についての情報も含まれている。直接相談につなげることができた事例もあれば、保健室においてSCと生徒がコミュニケーションを図るきっかけとなったこともあった。

また、小学校養護教諭との連携も活かし、小学校時の様子や生育状況など現在の中学校生活の中では把握できない情報を得ることによって、対応方法を検討したり、よりよい変化をとらえることができたりした。

（この項、二瓶久美子）

V ピアサポートプログラム

ピアサポートプログラムは従来通り、スクールカウンセラーがファシリテーターとして行ったものに加え、今年度は新しい試みとして2学年の各クラスでピアサポートのエクササイズの内容を道徳の時間に行った。

SCの担当したピアサポートプログラムは、平成20年度同様今年度もSCだよりで参加を呼びかけ、のべ13名が参加した。昨年度までは昼休みを利用して5回構成で実施していたが、学校行事や高校説明会などと日程が重なり全参加できるメンバーが少なかった。そのため今年度は3回構成を試みたが、インフルエンザによる学年閉鎖もあり全参加できたメンバーは1名のみであった。また参加動機を「自分が話したいことを話せるように」とするメンバーが多かったことは、アサーションスキル向上への期待が大きいものと考えられ、来年度以降は新しい形での取り組みの検討が必要かもしれない。

2学年の各クラスで行ったピアサポートプログラムは、「協力するために」用の活動を行った。具体的には、5～6人ぐらいのグループで1人が廊下にある絵を見て、他のメンバーに言葉で伝えて用紙にその絵を描く

表4 SCが担当したピアサポートプログラムの開催日時と内容

回	月日	エクササイズの目標	内 容	参加人数
第1回	11/19	知り合うために	自己紹介ワークシート	7名
第2回	11/26	聞き方・伝え方	スイッチ	1名
第3回	12/3	ロールプレイ	相手も自分も大切にした言葉で伝えよう	5名

活動である。最初はなかなかうまく伝えられない場面が見られたが、他の人の助言で伝える方も聞く方もうまくなっていく、楽しく活動していた。一方、言葉で伝える難しさを感じていた生徒も多くみられた。

(この項、金成美恵、樋上 聖)

V 附属四校園教育相談推進委員会

1. 目的

本委員会は、附属幼・小・中、特別支援学校が、教育相談機能の充実に向けて連携した実践を推進する中核的な任務を担う組織として平成16年度に発足した。保護者や教師、子どもたちのカウンセリングをコーディネートするとともに、各校園と家庭がより緊密な連携を図りながら、子ども達を逞しく、健やかに育てるための教育相談を積極的に推進することを目的としている。基幹校を附属中学校として、委員長（附属中学校長）、副委員長（附属中学校副校長）、庶務（附属中学校主幹教諭）、委員（各校教諭、各校養護教諭、SC）から構成されている。

2 会合とその内容

平成21年度は、年2回の会合を開催し事例研究を行った。第1回目の会合では、中学3年生1名及び小学2年生1名と小学3年生1名を事例として、現在の様子とその対応、今までの対応、これからの対応のあり方について話し合った。2回目の会合では、1回目の児童生徒のその後の様子と新年度に向けて幼・小・中の接続がスムーズに行われるように小学校6年生1名及び幼稚園児2名の事例について話し合った。特別支援学校で教育相談を受けた子どもでもあるので、四校園での指導や教育相談の様子などから今後の関わり方についての話し合いを行った。新年度からの指導に役立てられるものと大いに期待している。また、事例研究を通して各校園の教育相談体制が一層充実したことも大きな成果である。次年度以降、事例研究を中心とした会合を進め、各校園がさらに密に連携し実効ある教育相談を推進していきたい。

VI 成果と今後の課題

潜在的不適応生徒への予防ケアと四校園連携

20年度の活動報告にも記したように、問題行動として顕在化していないが漠然とした不適応感をもって

る生徒への予防的ケアは今後も重要な課題である。

SCが行っている体験活動はそうした潜在的不適応生徒がカウンセラーのもとを訪れる際の心の敷居を低くする効果がある程度もっているといえるだろう。また、今年度試みた1学年の各教室・各生活班でSCが共に昼食をとることも、同様の効果があるとともに、SCの観察から生徒の気になる面をチェックすることにもつながる。そうした生徒について、校内の教育相談推進委員会で話題にあげ、学年教員その他の教員の情報や意見をききながらその生徒の支援を考えることができた。

2学年のクラスで試みたクラスワイドの「ピアサポートプログラム」はまたこうした予防ケアに加え、生徒たちの自己理解、他者理解をすすめるために、活用する意義があると思われる。

また、附属四校園教育相談推進委員会は、幼から小、小から中の連携、そして特別支援学校の「発達支援室・けやき」と各学校と連携をさらに確かなものにするものとして、機能しつつある。

こうした成果と課題をかえりみながら、22年度の「教育相談室」をすすめていきたいと考えている。

註

- 1) 青木真理, 佐藤文子, 石井博行, 君島勇吉「平成14・15年度 附属中学校カウンセリング・ルーム活動報告」福島大学教育実践紀要第47号 pp63-66 2004
- 2) 青木真理, 渡部由美, 佐藤敏宏, 石井博行, 君島勇吉「平成16・17年度 附属中学校『教育相談室』活動報告 福島大学総合教育研究センター紀要 創刊号 pp115-118 2006
- 3) 青木真理, 金成美恵, 渡部由美, 遠藤博晃, 天形健, 君島勇吉「平成18年度 附属中学校『教育相談室』活動報告」福島大学総合教育研究センター紀要 第3号 pp109-112 2007
- 4) 青木真理, 金成美恵, 渡部由美, 橋本浩幸, 天形健, 島義一「平成19年度 附属中学校『教育相談室』活動報告」福島大学総合教育研究センター紀要 第4号 pp97-100 2008
- 5) 青木真理, 金成美恵, 安藤久美子, 安田雄生, 天形健, 島義一「平成20年度 附属中学校『教育相談室』活動報告」福島大学総合教育研究センター紀要 第5号 pp81-85 2010

図3 「私のお気に入り」ワークシート

私のお気に入り

映画「サウンド オブ ミュージック」のなかで、家庭教師マリアは子どもたちに、「怖いときは、お気に入りを思い出してごらん」と問いかけ、「My Favorite Things」という歌を歌います。

犬が吠えたって、蜂が刺したって、悲しい気持ちがするときだって
お気に入りを思い出しさえすれば
もう気分はそんなに悪くない

この歌のように、「私のお気に入り」を書き出して、眺めてみましょう。いくつでもかまいません。

眺めてみて、いかがですか。どんなことを感じましたか？
